No. 20 August 2003

Theatre & Policy

Creative Links へ

シルヴィア・ダウ

Sylvia Dow
Head of Education
The Scottish Arts Council

いま、コミュニティと学校との関わりにおいて、芸術団体の役割にコンテキストを与える2つの対立する構図がある。一方は、フレキシブルで、クリエイティブな労働力を求める政府や産業界である。彼らは、はっきり物が言え、責任がとれる人々を求めている。もう一方には、クリエイティビティや芸術、文化といったものより、明らかに測定できる成果や学問に重きを置く、学校システムである。

人々の生活や学習にとって、芸術、文化、そしてクリエイティビティが重要であることを指摘する研究は数多い。これらキーワードをネットのサーチ・エンジンにかければ、無数のレポート、研究、実践的なリサーチが得られる。明らかに、芸術やクリエイティブな活動への参加が、他の学校での活動から得られる単なる愉快な娯楽よりも、児童生徒たちに多くを与えている。異なる思考方法や、他のインテリジェンスの実践を提供するものである。著名な教育者ハワード・ガードナーによれば、問題解決の方法であり、見聞を持ち、思慮深く、雄弁で文化的な未来の市民として教育していく道なのである。未来の市民は、いかに選択を行なうのかを知り、横断的でクリエイティブに思考する能力をもつのである。

コミュニティにとっては、芸術プログラムは、集団としての表現ー声ーの手段と、場の真の精神をもたらす。芸術はコミュニティを再生させ、共生の精神を喪失した地域に、新しい精神と新しい希望をもたらし得る。これがいかに起こりうるかについては、世界中から多くの事例が見いだせるのである。

教育、芸術文化、そしてコミュニティをつなぐ橋がある。私の主張は、もし学校が橋を築くことができない、あるいは、築こうとしないのであれば、それは芸術団体の役割だということである。芸術団体は、地域と全国のコミュニティを観客としてとらえる。しかし、芸術団体が認識しなくてはならないことは、彼らはコミュニティや学校にもまた、積極的に関与する必要があるということである。厳密に実際的な見地でいえば、観客規模や未来の観客を増やすことになるだろう。しかし、教育アウトリーチプログラムに関わる真の理由は、芸術団体そのものが、ひとつのコミュニティのなかに存在するから、ということである。それは分けはなてないことなのである。もし芸術文化が、人々の暮らしに深く留まるものであるのなら、その本質に関わり、それがなしえるよう、あらゆる事業を行なうことは、芸術団体の義務である。

これを行なう一つの方法が、組織のなかに誰かーエデュケーション・オフィサーーを置くことである。エデュケーション・オフィサーは、学校と地域をつなぎ、プログラムを構築し、芸術団体の作品へのアクセスを向上させる方法を見出し、特別なプロジェクトを創造し、組織が仕えるべき人々に確実に存在するように助けるのである。

スコットランドには、これらの橋を築く手助けのためにデザインされた2つの主要な国家プロジェクトがある。一つは、カルチュラル・コーディネーター・プロジェクトである。政府資金により地方公共団体の教育部局に対して助成を行ない、学校のなかに週2日働くポストを創設するものである。このポストは、学校と地域を基盤とする、そして全国的に働く芸術家や、芸術文化団体をつなぐのを助ける。もう一つが、クリエイティブ・リンクス・プログラムである。問題をより戦略的な視点からとらえ、スコットランドの公的助成機関であるスコットランド芸術評議会が支援している。教育部局とのパートナーシップにより、このクリエイティブ・リンクスは、教育部局のかなり上位に新ポストを置いた。児童に提供される芸術のプロフィール、実践、量ならびに質を向上させ、教育的なプロセスを豊かにすべく芸術家と芸術団体の実際的なパートナーシップにづくりを目的としている。

ジョン・F・ケネディは次のように書いた。「芸術の生命は、妨害や騒動からはほど遠く、一つの国家の生命において、国家目的の中心に非常に近いものである。そして、国家の文明の質を測るものである。」芸術がすべての人々の暮らしに触れられるよう最良のことをすることは、私たちすべてー学校、コミュニティ、芸術家、芸術団体ーの責務なのである。

演劇教育から日本が変わる！？

いずみ　凛

こりゃ、すごいもんに出会ったぞ！　ドラマ・イン・エデュケーション（ＤＩＥ）、シアター・イン・エデュケーション（ＴＩＥ）を知るほどに思う。では、何がすごいのか。

まず日本の教育の流れの中で、これは革命的なことだ。思い出してみよう、子どもの頃を。体育などの特別な教科以外は、時折、先生の質問に対して発言することはあるものの、いすに座ったまま先生の話を聞き、黒板に書かれた文字をノートにせっせと書き写す。どんな世代であろうと、日本の授業の風景はおおかたこういうものではなかっただろうか。

日本では「授業を受ける」という。授業を受けて育ったわたしには、いつの間にかしっかり受け身な態度が身についた。そして、人前で思っていることを発言するのが苦手な、従順な人間になっていた。学校ではすてきな先生にもたくさん出会ったが、日本の授業の形態そのものに、わたしのような人間を生み出す素地があるような気がする。もちろん講義形式の授業のメリットもあるだろう。しかし、日本ではどの授業でも、とりあえず一方的な講義形式になりすぎてはいないだろうか。「日本人はシャイだ」ワークショップで海外の講師が必ず言うけれど、その一因はここにあるという気がしてならない。

今、わたしは大学で授業をしているが、ほとんどの学生がやはり人前でうまく話せない。だからといって、何も考えていないのかといえばそんなことはないのだ。言葉にできない想いがいろいろと渦巻いているのである。決して空っぽではないのに、それをどう言葉にしていいのかわからない。表現できない。人前で話したり表現するという訓練や経験があまりにも少ないのだ。自分自身をふりかえっても、いすにはりついて授業を受けるという教育の影響の大きさを感じずにはいられない。

学科の授業にもいろんな形で演劇的要素を取り入れることができる。からだを使って学びとる、ディスカッションしながら考える、コミュニケーションをとりながら共につくりあげる――そういう演劇の要素は、教育の場で大いに活躍できそうだ。

戦後、高度経済成長を迎えると、学校は産業社会に貢献する人材といわゆるエリートをつくる場となり、知識を詰めこむ学力偏重主義に拍車がかかっていった。その反省として、個性をのばし、自分自身で考えられる人間を育てようという動きが出てくる。しかし、実際にどうすればいいのか。知識や学力を授受することほど、それは簡単なことではなかった。日本にはそういう教育の歴史も方法論もほとんどなかったし、その成果もテストの点数に換算できるような学科とは違っている。

そういう意味でも、ＤＩＥ、ＴＩＥは大きな可能性をはらんでいる。総合芸術である演劇にはあらゆる分野の作業がある。他者との共同作業の中で、自分の得意なことを伸ばしていける。そして、それが他の人たちの作業と融合し、さらにパワーアップするのを目の当たりにすることは、大きな喜びと自信につながる。共同作業にはコミュニケーションと協力が不可欠だ。いかにお互いが刺激しあって創造的な力をふくらませていけるかが大切なポイントになる。想像力も大切だ。それぞれ違う意見や価値観をもつ人間がさまざまなアイデアをだしあって、時には摩擦や葛藤も経ながら、ひとつのものを創りあげることを体験する。そこから得るものは少なくない。

今、わたしは教育学特殊講義という授業で、参加する学生自身のドラマになるような発表会を開くことを目指している。声を出し、からだを動かす遊びをみんなでやり、好きな詩を歩きながら読み、それぞれが今どんなことを考えているのかを話し合い、自分の大好きなもの、こうありたい未来をからだを使って表現しつつ、そんな個人が社会とどうつながっているのかを考える――それぞれの個性が否応なく出て、とてもおもしろい。これらを構成して、学生たち自身のドラマに仕立てていくのだ。去年の授業では、既成の脚本を使って、フリースペースに照明を飾りこみ、衣裳もつけての上演にしたけれど、今年は何でもない教室でやってみようと思っている。今回は、自分たち自身の物語だという実感をもてる作品にすることが何より大切だ。

難しいのはどんなふうに進めていくかだ。わたしもまさに模索中である。演劇の現場でも、おもしろい稽古場、舞台づくりの現場を作り出すのはたいへんなことだが、教育の現場でも同じことがいえるだろう。確かにこういう授業の教師、ドラマティーチャーを育てるには、まだまだ時間がかかるかもしれない。けれど、いつか日本の学校に演劇的な活動が増えていけば、日本はずいぶん変わるんじゃないだろうかとわたしは本気で期待している。希望の見いだしづらい時代の中で、これは稀有な存在だ。やっぱりすごいのである。

総合学習の導入や演劇関係者の関心の高まりなども含め、今、はっきりと胎動を感じる。何かが生まれる予感だ。果たして何かを生み出すことができるのか、胎動が薄れて消えてしまうのか。それはこれからにかかっている。**（いずみ・りん／劇作家・大学講師）**

福岡の熱い３日間
演劇と教育のしあわせな関係の始まり

古賀　弥生

芸術文化を身近に楽しめる環境づくりを目指す「アートサポートふくおか」の主催で、７月２１日（月）から２３日（水）の３日間、ロバート・レーさんと中山夏織さんを福岡にお招きし、「体験セミナー：演劇と教育のしあわせな関係を探ろう～英国の手法に学ぶ～」を開催しました。英国での演劇と教育、地域とのかかわりに関するレクチャー、指導者向けワークショップ、ロバートさんが実際に子どもたちとのワークショップを行うモデル授業の３本立てでの実施です。

レクチャーは、ロバートさん自身が「ドラマ教師」「ドラマ・セラピスト」「地域劇場の芸術監督」という３つの立場で演劇に関わるようになった経緯など、ご自分の体験を通じて演劇が教育や地域に対して何ができるのかを語っていただきました。２、３時間のお話ではとうていフォローできない幅広く深い内容でしたが、参加者の食いつきは上々。

参加者の多くは、公立文化施設などで子どもの演劇講座の講師を務める劇団関係者や、学校劇の指導をする教員の方々で、その関心は「明日の講座で生かせるワークショップのネタがほしい」から「最近のＴＩＥの動向を知りたい」までさまざま。ワークショップとモデル授業では、ロバートさんの技術をしっかり披露していただき、参加者には大いに刺激になったと思います。ただ、指導者としての「引き出し」を増やすことのみに懸命になってしまうと「現実世界のコンフリクトを演劇という安全な世界に置き換えて体験させ、解決する力をつける」ことを実践して見せてくださったロバートさんの意図に気づかないまま通り過ぎてしまった人もいたも…と心もとない面もありましたが、アンケートに書かれた感想を見るとそれぞれが自分なりに何かを持ちかえってくれたようでほっとしています。

今回の企画は、参加者同士の交流も大きな目的でした。そのために交流会も実施したところ、多彩な参加者が名刺や資料を交換し、貪欲に「交流」する光景が見られ、オーガナイザーとしてはなにより嬉しいことでした。ここから学校に地域の演劇関係者が入っていくきっかけが生まれ、演劇と教育のしあわせな関係が始まれば最高の成果といえます。

涼しいえずこから暑い九州へおいでくださったロバートさん（「ビーチに行きたい」としきりにつぶやいておられました）、中山さん（福岡初お目見え。次はゆっくり遊びましょう）にあらためて感謝を申し上げます。

（こが・やよい／アートサポートふくおか代表）

教育現場に生かすための意味
演劇による社会貢献

猿田　洋子

８月２日（土）、３日（日）２日間、４回にわたり、ケン先生を招いての「ドラマ・イン・エデュケーション」ワークショップinこまがねが開催された。

「ドラマ・イン・エデュケーション」の重要性を頭でわかっていても、その概念や、具体的にどうなのかが、主催する私たちにも、人に伝えられるほどわかっていない中、このワークショップの開催は、最初は参加者集めの広報に苦労した。マスコミに話す場合も「手短に一言で」語ることが難しく、またチラシひとつつくるにも、その語りをどうするか迷った。けれど、口伝え人伝えに参加者が集まり始め、新聞、ラジオ等で宣伝する機会も与えられ、徐々に参加者が増えていった。長野県内で初めての開催ということで、県の地域づくり支援事業の助成、長野県、長野県教育委員会の後援ももらい、県内全域の公立小中高校宛てにＤＭも出した。私たちとしたら今回駒ヶ根で行うことをきっかけに県内にその考え方を広めたいという思いがあったため、県内全域に向けて広報した。

駒ヶ根で今回このワークショップが開催できた背景には１０年間続けてきた劇団昴とのワークショップ＆共同公演、そしてＲＡＤＡインこまがねの開催等の経験の上に、駒ヶ根の演劇活動の中では「演劇による社会貢献」が一つのテーマになってきていたということがある。昨年ＮＰＯ法人化したのは、そのことをより鮮明にするためだった。そこへ「ＤＩＥ」の話、ぜひ駒ヶ根でと手を上げた。

結果４セクションに県内各地から全部で４１名の参加。１セクション多いときで３０名、少ない時で２３名ほどの人数でワークショップは行われた。参加者は駒ヶ根の演劇関係者、地元教職関係者、地元のカウンセリングに関心のある主婦、大学生、県内各地の教育関係者など様々。私も主催者ながら参加者の一人として実際にワークショップを体験した。

ワークショップ慣れ（？）している駒ヶ根の面々にとっては、「あ、このゲームね」というおなじみのゲームも多くあったが、ケン先生はそのゲームを教育現場に生かせるための「意味」を私たちにとてもわかりやすく胸に落ちるように話してくれる。今まで、そんなゲームのいくつかを地元のワーク　ショップで使って講師をしていたメンバーは、その意味がとてもよくわかり、いっそう役立ったらしい。

昨年名古屋でジェームスの「ＴＩＥ」マシンガンワークショップを受けていた私と２人のメンバーにとっては穏やかなケン先生の胸にしみいるような教え方にさすがドラマ教師のドラマ教師と感動した。
当初の参加者集めの心配も杞憂に終わり、成功裏に終えることができた駒ヶ根の「ＤＩＥ」。参加者の感想も上々、これから、それぞれの現場に活かしていけるのではないかという実感も持て、来年の日程も内定した。けれど我々の野望（？）は駒ヶ根だけでこのことが広がることではない。できたら長野県の教育課程にドラマの授業を導入させることはできないだろうか・・・今年の結果を踏まえ、そのためにこれから活動していきたいと思っている。**（さるた・ようこ／ＮＰＯ法人こまがね演劇文化創造劇場事務局長・駒ヶ根市議）**

ドラマ・イン・エデュケーションのマジック

嶋　真澄

夢中になった。身体の中に溜まっていたエネルギーが全て外に出た。ありあまるエネルギーを全部外に出せることってなかなかない。それがどんなに気持ちのよいことなのかを実感した。私でさえそうなのだから、現代の生活の中で、特に学校の中では、十分に使うことのないだろう子どもたちのエネルギーはどこで発散させるのだろうか。とにかく、「このドラマ・イン・エデュケーション（以下ＤＩＥ）」という手法は、自分の身体や頭をフルに使いながらエネルギーを発散させることができる。何もないのになぜか夢中になれる。何もないところから何かが生まれる。不思議で可能性に満ちの仕事に携わっているわけでもない。そんな私がなぜＤＩＥに興味を持ったのか。ボランティアで、子どもやたくさんの外国人と接したり、ＮＰＯ支援センターでの仕事を通じて、異なる背景を持つ人々が集まったとき、それぞれの意見を大事にしながら協働していくことがいかに難しいかということ、そしていかに社会的な力やコミュニケーション力が必要かということを実感した。そんななか出会ったのがＤＩＥだった。４歳の頃から演劇など生の舞台を観て育ってきて、演劇が自分に与えてきた影響を考えると、演劇の持つ力やＤＩＥの素晴らしさを理解するのは容易だった。
三重県の「MAPみえ子どもの城」では記録を、東京では参加者としてＤＩＥのワークショップを実際に体験させていただいた。今回は実際に体験したことで見えてきたことを中心に書きたいと思う。

プロの役者さんたちが多い中で、私は即興はもちろん、静止画も初めての経験で、上手くやらなきゃ、考えなきゃと、まるで１人で全てを完成させなければならないように捉えてしまっていたときはしんどかったし、何も生まれてこなかった。でも少したって、「自分が全部する必要はないんだ。仲間と一緒に少しずつ出し合って創っていけばいいんだ。」と気付いたときから、とても楽になって、ものすごく楽しくなった。自分の身体全部と頭をフル回転させて、仲間と一緒に何かを創り上げることのおもしろさに夢中になった。１人では考えられないようなことが、１人１人のアイディアを少しずつ組み合わせることで、信じられないことが起こる。その過程ではあらゆる力を要求されるが、それはまさにケネス・テイラー先生（以下ケン先生）が教えてくれたＤＩＥで学ぶことができる要素である、社会的な力(Ｓｏｃｉａｌ　Ｓｋｉｌｌｓ)、コミュニケーションの力（Communication Skills）、ドラマの力（Drama Skills）であり、ＤＩＥではこれら全てを学ぶことができるということを実際に体験することで実感した。
まるでマジックのようだった。たった１枚の紙切れがドラマの種となって広がりを持ち、あらゆる学びの種となる。ジェスチャーや身体の動きや顔の表情だけで、それは危険な秘密文書になったかと思えば、音楽を変えることで、合格通知になったり、ラブレターになったり、亡くなった家族の残した手紙になったりもした。グループワークでは、１人１人の少しずつのアイディアが組み合わさって、１枚の紙からひとつの物語が生まれた。たった１枚の紙切れで何時間でも遊ぶことができる。このマジックの効果は、やはりドラマ教師の力量によって全く違うものになる。ドラマ教師こそに優れた想像力、創造力、遊び心、生徒たち１人１人を観察する力、生徒たちの反応に合わせて授業の内容を臨機応変に変えていける力、あらゆる学びにつながるドラマの種を見つける力・・・など、あらゆる力が要求されること。それだけにこのドラマ教師の養成がいかに難しいかを実感した。イマジネーションやクリエイティビティーをほとんど要求されない受動的な教育システムの中で育ってきた先生たちが、そういった力を必要とされる時、どのように先生を養成するのか。また、受動的な日本の教育システムのなかで育っている子どもたちにとって、主体性と、普段使わないあらゆる力を要求されるＤＩＥを簡単に受け入れることができるのか。また、さらにドラマ教師の存在以前に学校や保護者がＤＩＥの素晴らしさを理解し、受け入れることができるのか。ＤＩＥの効果を分かりやすく説明していく必要がある。
ＤＩＥの日本での可能性を実感するとともに課題も見えてきたが、今回ワークショップに参加されていたたくさんの方々の熱心さに、明るい未来を見た。三重では初日のセミナーに５０名、東京の最終日のマスターク

ラスに３０名と、それぞれ定員一杯の参加があった。皆さん非常に熱心で、休憩時間や、終了後も学んだことを忘れないようにメモをとったり、分からないところを質問したり、実際に子どもたちへのワークショップに携わっている参加者同士情報交換が活発に行われていた。

この会場の雰囲気はケン先生のお人柄によるところも大きいと思う。エネルギッシュなワークショップにも関わらず、休憩時間や終了後も参加者の中に入っていってにこやかな笑顔や冗談で場の雰囲気を和ませていた姿が印象に残っている。休憩時間をも大切にし、コミュニケーションを図ることがワークショップの成功にも大きく影響を与えていたと思う。そしてもう１つ、ワークショップ成功に影響を与えていたのは「褒めること」だと思う。「褒めること」が大切だとケン先生はおっしゃっていた。褒めることで子どもたちが自信を持ち、主体的に参加できること。上手くできない子がいたら教師はそれをよく見ていて、次の活動のなかでその子ができる役柄を与え、自信をもたせること。「褒められること」がどんなに嬉しく自信を持つことができるかは、私自身が体験することができた。上手くやることが大事なのではないと分かっていながらも、素晴らしい演技を見せてくれる役者さんたちの中で戸惑ってしまい、最初は上手くできないことに自信をなくすこともあった。そんな中、ケン先生は私ができそうな役を与えてくれたり、「よく出来たね！」と褒めてくれたり、そんなささいなことが、どれほど大きな意味を持つか、次への学びへつながっていくかということを実感した。生徒たちを良く見ること、適切な時期に適切なことを要求すること、代表でデモンストレーションをするグループや個人を注意深く選ぶこと、そういったことが生徒たちが自信を持って主体的に学ぶことのできる授業にするために必要だということを実感した。

ものすごく多くの学びのきっかけが隠されているＤＩＥの手法。テレビゲームより、パソコンより、テレビより、自分の身体と頭を使って主体的に、１人ではなく仲間と協力しながら何かを創造していくことのおもしろさ、楽しさを多くの日本の子どもたちに体験して欲しい。今年も全国各地でその種が撒かれた。才能と情熱にあふれたこのプログラムへの参加者たちが各地で花を開かせることと思う。

（しま・ますみ／ＴＰＮアシスタント・コーディネーター）

エデュケーション・ワークショップから クリエイティブ・リンクスへ

中山　夏織

社団法人日本劇団協議会の専務理事の古城十忍氏（劇団一跡二跳）から、「演劇人ではない人々を対象としたワークショップができないだろうか」と相談をもちかけられたのが、２０００年９月のことだ。何が求められているのか、私たちに何ができるのかを模索した結果、翌年７月、教師を主対象とした最初の「ドラマ・イン・エデュケーション」が開催された。昨年からは「子どもと舞台芸術－出会いのフォーラム」に参加するようになり、参加者の数も急増した。そして３年目にあたる今年は、これまでの「ドラマ・イン・エデュケーション」に加えて、演劇人が演劇人として教育に関与する視点から、「シアター・イン・エデュケーション」との併催となった。一つには、総合的学習の高校への拡大のなかで教育における演劇人の役割が確実に広がりを見せはじめていたからだ。しかし、この併催の企画を告げられたとき、正直のところ、まだ多様性を受け入れるには時期早々、混乱を招くだけであり、難しいのではないかと感じていた。なによりも規模を２倍にして、それなりの参加者が集まるのだろうか？

だが、杞憂に過ぎなかった。十分な参加者が集まったのみならず、多くの参加者が「多様性」の意味を理解した。とりわけ、シアター・イン・エデュケーション（セミナー＋２日間のワークショップ）、ドラマ・イン・エデュケーション（２日間のワークショップ＋１日のマスタークラス・ワークショップ）の全６日間に出席した参加者たちは、同じようなエキササイズが目的によって、あるいは指導者によって、こうも変化するのかということを実感しただろう。これは指導者としての自分自身のあり方を見いだすプロセスへもつながっていくものなのである。

初年度からのリピーターが多いのも、いい意味でも、悪い意味でも、この種のワークショップの宿命である。リピーターは強い味方ではあるが、巨大な学校というコミュニティにおいては、このような教師は、片隅に追いやられてしまいがちである－彼らをどうしたらもっと支えてあげることができるのだろう？

今回の特徴は、もう一つ、プロ演劇人から多くの参加者を得たことである。プロ演劇人の意識が子どもたちを対象としたワークショップで格段に向上したという話はよく耳にするし、目にもする。ワークショップでの子どもたちの反応を通して、自分が演劇に働き、演劇に仕える意味を見いだしていくのである。

しかし、児童青少年演劇を主たる活動としていない劇団や演劇人が、児童青少年の教育に関わることに抵抗を示すことは少なくない。また、抵抗を示されることも少なくない。子どもの心や、教育を知らぬものが教育に関わるべきではないという見地からであり、特殊な教育やトレーニングを受けたものだけが関与する資格を持つと

いう考え方である。しかしながら、この３年間を通して私がこの目で確かめてきたのは、演劇教育の本質としての「ただ一つの正解があるわけではない」が、ここにも適応するということである。子どもたちが失敗しながら学ぶように、指導者もまた失敗しながら学ぶ。演劇教育が子どもに経験を通して学ばせるように、指導者もまた経験から学ぶ。それを危険と指摘するかもしれないが、指導者が懸命であり真摯であれば－自分に足らぬものの存在を自覚さえしていれば、子どもたちは、その姿からも多くを学びとる、と感じるようになった。「特殊な教育やトレーニングを受けたものだけが関与する資格を持つという考え方」は、演劇教育に「ただ一つの手法や正解が正しい」というドグマを持ち込むことに他ならない。

だが、ドラマ・セラピーとなると、明らかに、話は違う。

東京のみならず、各地でのワークショップでの参加者からの質問、そして近頃、私どものＮＰＯに問い合わせが増えているのが、ドラマ・セラピーの領分である。今回、ＴＩＥのロバート・レーも、ＤＩＥのケネス・テイラーも、それぞれ自分の言葉で、演劇教育とドラマ・セラピーの区分を明らかにした。とりわけ、レーは、まさにドラマ・セラピストの資格をもったドラマ教師であり、演劇人であるだけに、心理学をも踏まえて語った違いは、重い意味をもったと思う。教師であれ、プロ演劇人であれ、求められたとしても、子どもの心を救ってあげたいという真摯な思いがあったとしても、安易に踏み込んではならないのが、このドラマ・セラピーの領分なのである。それにしても、このセラピーばやりは、何を意味するのだろう？

ともあれ、この３年間、通訳コーディネーターとして関わってきた。楽しかったのだが、辛くもあった。専門でないだけに苦しんだし、適切なプログラム作りや十分な通訳も出来ない自分への憤りも強い。だが、副産物として、私のなかのヒューマン・リソース・マネジメントの視野は演劇教育からずいぶん広がったように思う。ヒトを育てる目的や、イマジネーションやクリエイティビティの意味、そして、その手法を改めて考えさせられてきた。実際のところ、まだまだ学ばなくてはならないと思う。学びに終わりがないことをも教えてくれるのが、演劇教育なのだとも実感してしまう。

もう一つ重要なことがある。一人一人の教師や演劇人の、そして様々なコミュニティの「思い」との出会いである。文化政策やアートマネジメントの研究というものは、報告書を読んだり、机上で議論していると、きれいごとや、単に新しものの奇をてらうものに陥りやすいし、足元がみえにくくなる。俯瞰的に見る、マクロで見る必要は確かにあるのだが、引き換えに失うものも多い。しかし、コミュニティの「思い」を踏みにじってまで確立する必要のあるものなぞ存在するのだろうか。

今回、東京のみならず、福岡県福岡市、長野県駒ヶ根市、宮城県柴田郡大河原町、三重県松阪市といった地域での開催を通して、多くの人々の思いと、生々しい問題を肌で感じることができたと思う。言葉をつなぐ通訳の特権でもある。ヒトが関わるワークショップのダイナミクスのもたらす喜びはたまらなく大きい。だが、それに充足してばかりもいられない。

アートマネジメントは公立文化施設の乱立から認知されるようになった。カラの箱を埋める役割を、参加型ワークショップが担ってきた感もある。大規模な一過性のプロジェクトに資金を浪費するのではなく、ヒトに投資されるわけで、それなりの意味がある。そして、ただただワークショップであればいいという時期を経て、確かに、より質の高いワークショップが各地で展開されるようになった。次には、目的と手法の細分化も進んでいくだろう。芸術家と学校の協働も、いまだ遅々としてはいるがはじまっている。

ワークショップというような協働の形式を借りて、コミュニティやヒトのなかで芽生えつつあるものを消費するのではなく、確かに育てていくために何が必要なのだろう。この思いを育くみ、社会に働きかける戦略として発展させていく「仕掛け」をデザインすることが、特定の地域を基盤としない理念・政策提言型の芸術ＮＰＯの役割であり、コミュニティや人材育成の視点から文化政策やアートマネジメントに関わるものの使命であり、アイデンティティであるべきなのだと痛感している。

本誌冒頭で、シルヴィア女史が書くように「もし学校が橋を築くことができない、築こうとしないのであれば、それは芸術団体の役割」なのである。だからこそ、芸術は社会のなかに生きる。だが、日本では、芸術家は社会から離れたところでひきこもり、芸術が芸術として本来もつ力が長く押し込めてきた感もする。学校が門戸を開いてくれないからだ、と訴える声も強い。しかし、エデュケーション・ワークショップの主催者である社団法人日本劇団協議会は、１０月、学校公演やワークショップ、さらに教師の現状を知ることで、教育と関わる演劇人の意識を向上させるためのセミナーを開催することを決めた。演劇人が橋を築こうと動き出したのである。

芸術のもつ、本来の力を蘇らせ、様々な思いをつなぐ「橋」もまた一つではないだろう。どんな橋を設計していけばいいのか。ヒトが関わるダイナミクスからクリエイティブに紡ぎだしていきたいと思う。

（なかやま・かおり／アーツコンサルタント・シアタープランニングネットワーク代表）

Creative Links

セミナー・ワークショップ＆シンポジウム

クリエイティブ・リンクス

～芸術、学校、コミュニティをつなぐ思い～

いま日本全国で、市民やＮＰＯのイニシアティブで、芸術、学校、コミュニティをつなぐパートナーシップが生まれつつあります。しかし、同時に、新たな問題も山積しつつあります。直面する課題を乗り越え、確かなものとして発展させていくためのインフラストラクチャーと、それを担う人材の育成について、スコットランド芸術評議会エデュケーション部長シルヴィア・ダウ女史とともに考えていきます。

日時　　２００３年１１月１６日（日）午前１０時３０分～午後７時３０分
会場　　オリンピック記念青少年総合センター／センター棟

＜セミナー・ワークショップ＞　午前１０時３０分から午後３時
各セクターの思いを集約し、パートナーシップを企画し、調整役をも担うエデュケーション・オフィサーの育成をめざす実践的なトレーニングに挑みます。

＜シンポジウム＞　午後４時～午後７時３０分
スコットランドの「クリエイティブ・リンクス」プロジェクトの理念と実践を紹介するとともに、日本各地で展開されている様々な芸術と市民の新たな関係を紹介し、さらなる発展の方途を探ります。

★　詳細は、ホームページを参照ください。http://www5a.biglobe.ne.jp/~tpn
主催　　特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク
助成　　国際交流基金草の根交流国際会議助成／大和日英基金　　後援　ブリティッシュ・カウンシル

文化労働者の雇用と社会保障

European Arts and Entertainment Alliance調査

この夏、世界でも名だたる「アヴィニオン演劇祭」が、俳優など文化労働者の社会保障改悪反対を掲げたストライキにより中止になった際、フランスの俳優たちに対して、少なからず批判的な雰囲気が流れた。日本の文化政策では、雇用や社会保障の問題を考慮することはない。しかし、ヨーロッパ諸国の文化政策にとっては、雇用と社会保障は公的助成以上に重要な問題なのである。というのは、少なからぬ国にとって文化政策は、文化労働者の雇用に端をしたからである。

ここにＥＵ加盟諸国の「文化労働者の雇用と社会保障」をまとめた調査報告書がある。同報告書を中心に、文化政策と雇用・社会保障の「相関関係」を探ってみよう。

俳優など文化労働者の社会保障の問題を難しくわかりにくくするのは、雇用期間の短さによる、被雇用者なのかの「解釈」の相克にある。また、雇われた芸術家が、他の芸術家を雇い入れることもある。さらに公務員のステータスを持つものも少なくないからややこしい。また、被雇用者ではない自営業者としての文化労働者が、労働法では守られなくても、被雇用者と同様の社会保障が得られる場合も多い。だが、一方で、法的には守られうる立場にあっても、仕事の状況によっては雇用者の圧力を受けざるをえない場合が少なくない。これに「経費」－税制－や、トレーニングの問題も絡んでくるので、一筋縄ではいかないのである。

実際のところ、どのように守られ、保障が得られるのかについては、国のコンテキストにより、実に様々である－これを考慮することなしに、どの国の文化政策が優れていると検証するこことがどうしてできるのだろう？　芸術家にとって、またより広域な文化労働者にとって、雇用と社会保障をめぐる問題は「助成プログラム」より致命的な意味をもつ。

フランスでは、１９６９年の労働法が、文化労働者のなかの「パフォーマー」について、自ら「事業者」として登録しないかぎり、「被雇用者」のステータスを保障してきた。この特殊な扱いが、現在、ＥＵ全体のなかで批判にさらされている。その一例としては、海外からフェスティバルにカンパニーを招聘した際、もしそのカンパニーが雇用者として社会保障にかかる負担を払えなかったとしたら、フェスティバル主催者が負担しなくてはならないといったことがある。

ところで、この夏、ストライキに追い込んだ社会保障の改悪の対象は、失業補償制度にある。過去１年間に最低５０７時間（但し、単純累計ではなく、収入と労働時間とをかね合わせた計算式が用いられる）働いた実績を示すことができれば、１２ヶ月の失業補償が得られるというもので、多くのパフォーマーがこの失業補償をシーズン・オフ期間のための収入保証のために活用してきた。本来、雇用者負担なのだが、払えない雇用者が増え、政府の赤字補填額が増大しているために、改正が持ち出されたのである。これを「甘えている」とみる人もいるだろう。だが、シーズン・オフがきわめて長く（仕事がない）、ホリディを好む国民性の必然とも考えられるし（１９３９年設立のホリディのための基金もある）、もっと現実的には、どれだけのパフォーマーが年間５０７時間の有給仕事を得ているのかという問題にもつながる。実際、とりわけテレビなどで働くパフォーマーの労働条件は悪化をたどっている。政府は産業のために、むしろ経営者を守ることを選択したと見ることもできる。自由、平等、博愛の国の悩ましい選択の余波はどこまで広がるのだろうか。

FUNDRAISING

ＯＷＳふくしの会
１０周年記念・チャリティー公演

「みんないこうよ！ 音楽大好きコンサート９・２１」

「コンサートに行けない人達に、良い演奏で生の感動を届けよう」をコンセプトに、年１０～１５回にわたり、首都圏の障害者・高齢者施設、病院等の「訪問コンサート」を実施してきた「ＯＷＳふくしの会」（代表：磯貝靖洋）が、その１０周年を記念して、９月２１日、オリンピック記念青少年総合センターにてコンサートを開催します。

コンサートには、障害者・高齢者、その家族や介護スタッフや、ボランティアなどが招待されることになっていますが、そのための資金が不足しています。

ＯＷＳふくしの会では、コンサートの主旨にご理解とご賛同をいただき、支援していただける方を募っています。（協賛金は、１　口：１０００円以上。プログラムに協賛者のご芳名を記載。）

詳細は、ＯＷＳふくしの会までお問合せください。

ＯＷＳふくしの会
ＯＷＳふくしの会１０周年記念コンサート実行委員会
〒160-0023　東京都新宿区西新宿３－５－３－２０３
TEL&FAX　０３－３３４８－４１５８
e-mail　info@ows.ne.jp

ネットワークユニットＤＵＯ
指導者養成ゼミ

俳優指導者になるための イントロダクション・コース２００３

９９年から、英国の演劇指導者を招聘して「関西演劇ワークショップ」を実施してきた「ネットワークユニットＤＵＯ」が、日本演劇界には俳優のための基礎トレーニングの指導者が足りないと、まずはその人材を発掘するための３ヵ年プロジェクトに着手することになりました（２００４年２月、東京・森下スタジオで開催。定員１５名。参加費は２万円を予定）。指導にあたる講師は、海外で専門教育を受けてきた日本人の俳優指導者たちです。

財団法人セゾン文化財団のご支援を得ておりますが、それでも尚、資金が不足しています。ネットワークユニットＤＵＯでは、この企画への資金援助を求めています。（寄付金は、１口：１０，０００円。）

詳細は、ネットワークユニットＤＵＯまでお問合せください。

ネットワークユニットＤＵＯ

〒604-8121　京都府京都市中京区十文字町４３９－６０３
TEL&FAX ０７５－２１２－４７７１
e-mail bxa@04650@nifty.ne.jp

編集後記

ヨーロッパでは記録的な猛暑、日本では冷たい雨が降り続く寒い夏が続いています。１ヶ月近くにもわたるエデュケーション・ワークショップ２００３シリーズを終えて、なかば放心状態で、この「シアター＆ポリシー」の編集に携わっていますが、本誌もこれで通巻第２０号を迎えました。少し驚いてもいます。地味なものであっても、隔月での発行は、実際、当法人のすべてのスケジュールを左右する存在になっています。ですが、あくまでも基幹事業として、大切に育てていきたいと願っています。これまでにも多くの方のご協力を得てまいりました。これからも多くの方にご協力いただきたいと望んでおります。継続する力を皆様からも頂戴したいと思います。何卒、ご指導・ご鞭撻くださいますようお願い申しあげます。（中山夏織）

特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク

国際化時代の多様な文化という視点に立ち、舞台芸術関連の様々な職業のためのセミナーやワークショップをはじめ、調査 研究、情報サービス、コンサルティングなど、舞台芸術にかか るインフラストラクチャー確立をめざすヒューマン・ネット　ワークです。国際的な視野から、舞台芸術と社会（とりわけ、 教育、福祉、コミュニティ）との関係性の強化、舞台芸術関連職業のトレーニングの理念構築とその具現化、文化政策・アートマネジメントにかかる情報の共有化、そしてメインストリームシアターとコミュニティシアターの相互リンケージを目的としています。

２０００年１２月６日、東京都によりＮＰＯ法人として認証され、１２月１１日、正式に設立されました。

Theatre & Policy ＜シアター＆ポリシー＞

シアタープランニングネットワークの基幹事業として、２０００年６月から定期発行（隔月刊・年６回）されています。定期購読をご希望の方は、シアタープランニングネットワークの準会員としてご参加下さい。

年会費３千円（送料込み）を下記までご送金ください。送金の際には、住所、氏名、電話番号を忘れずにご記載下さいますようお願い申しあげます。

郵便振替口座　００１９０－０－１９１６６３　加入者名　シアタープランニングネットワーク

Theatre & Policy
２００３年８月２０日発行（通巻第２０号）
編集人　中山夏織
発行 シアタープランニングネットワーク
Copyright 2003 by Theatre Planning Network
禁無断転載

特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク
〒１８２－０００３
東京都調布市若葉町１－３３－４３－２０２
電話＆ファックス　０３－５３８４－８７１５
e-mail tpn1@msb.biglobe.ne.jp
http://www5a.biglobe.ne.jp/~tpn